



むかしむかし、作才村を流れる小さな川に、たいそう立派な石の橋がかかっておった。

あるとき、このあたりをおさめているお殿さんが、この橋をおわたりになった。

「おお、みごとな石じゃのう。気に入った。すぐに、屋敷に運んでまいね。」

お殿さんのご命令や。断ることはできなかった。

早速、村人が、川から石をはずそうとしたが、この石、えろう重とうてなかなか動かへん。大勢で力を合わせ、やっとはずした。

それから、押したり引いたり、

「ヨイシヨ ヨイシヨ」

と、ちよつとずつちよつとずつ動かして、やっとお屋敷までたどりついた。



「ご苦労やったなあ。どうじゃ、これほどの石は、めったになかろう。わしは、これを玄関のふみ石にしようと思う。」

お殿さんは上機嫌で、家来たちに自慢した。

さて、その夜もふけた頃ころ

「うーん うーん。」

と、うめくような、泣くような、もの悲しいかな声が出て、お殿さんは目をさました。

「あの声は、どこから聞こえてくるのか、確かめてま
いれ。」

家来たちは、お屋敷のすみずみまで調べてまわっ
た。やがてひとりの家来が言うてきた。

「玄関のふみ石が、作才村から運ばれてきたあの石が
泣いております。」

「ええっ。あの石が……」

お殿さんも家来たちも、ふみ石のまわりにかけつけ
た。息を止めて待っていると、

「作才のうゝ 作才のうゝ。」

と、確かに石が泣き出した。みんなびっくりしたが、
一番おどろいたのはお殿さんやった。お殿さんの顔色

が、みるみる青くなっていった。

「この石をすぐに、元のところへ返してやれ。」

次の日、村人がお屋敷に呼ばれた。石を村へ持って
帰れというんや。

「なんでや。昨日運んだばかりやのに、なんぞあつ
たんかいな。」

と、口ぐちに言うてたところ、昨夜ゆうべのことを聞かされ
た。

「そうか。村へ帰りたいと泣いたんか。そんなら大事
に連れて帰ったろな。」

と、みんなで

「ヨイショ」

と、引き出しはじめた。そうしたら、こんどは石が楽らく
に動くやないか。昨日は、あないになんぎして運んだ
石が、今日は、半分ぐらいの重さになっていた。やす
やすと運び出し、作才村の元の小川にかけてやった。

石橋の石は、それからは、夜になっても泣くことはなかったそうや。

それからしばらくすると、この石橋の下に入って石を削り取っていく者が現れた。子どもの夜泣きで困った親が、こっそりと削っていくようや。

どうやら、この石のかけらを煎じて飲ませたら、夜泣きがなおり、よう寝るといふことらしい。

こんなうわさが広まって、石を削りに来る者が絶えなかったそうや。

長い長い年月がたった。

明治時代になり、村の人びとのくらしも変わった。

このあたりの道を修理することになり、石橋を取りはずした。ところが、運ぼうとすると、石は重とつて動かへんのや。

「また、お屋敷に運ばれる」

とも思ったんやろか。そこで村人が、

「お前をどこかに持っていくのとちがう。この村の慈光寺さん^{じこうじ}とこで、大事にしてもらうのや。わかったか。」

と、言い聞かせると、石は急に軽くなり、やすやすと運ぶことができた。そして、寺の前までくるとひとりでに立ち上がったそうや。

不思議なことやなあ。

それから後、この石は、

慈光寺の前で二つのとうろ^{とうろ}を従え、堂々と立ち続けているのや。

